

\\ 研究者と大学院生の学術交流の場を創設しました //

人間の
生活と文化

対象は
教職員
大学院生
学生等

学会誌は
国際学術誌
『人間生活
文化研究』

大学院生の
研究成果
発表の場

学術交流の
促進

産官学連携
支援

若手研究者
育成支援

社会課題対応

The Association for Human Culture Studies

人間生活 文化学会

2025年

10月18日(土)

13:00~16:30

大妻女子大学

千代田キャンパスG棟5階

創設記念シンポジウム

申込不要

「産官学で創る大学院教育－高度専門職業人への道」

大学院生の発表と、産官学連携による大学院教育の未来を考えるシンポジウムを開催します。
社会の多様化とグローバル化の中、大学院教育は研究者養成を超え、
社会で活躍する高度な専門職業人を育成する重要な役割を担っています。

プログラム

13:00~

開会挨拶

田中直子(大妻女子大学人間生活文化研究所所長)

13:05~14:00 第1部 大学院生発表『大学院で学ぼう!』

高校生や大学生に向けて、大学院生5~6名が研究に興味を持ったきっかけや先生との出会い、自身の研究内容を発表します。

14:15~15:45 第2部 シンポジウム

基調講演 北原秀治(東京女子医科大学特任准教授)

パネル討議

16:00~16:30 第3部 意見交換会

会場:G棟5階 参加者による交流の場です。

パネリスト

北原秀治(東京女子医科大学特任准教授)

荒川敦史(国立研究開発法人 科学技術振興機構)

鈴木竜太郎(日本ビューレット・パッカード合同会社)

吉越里桜(SCSK株式会社、大妻女子大学大学院修了生)

松村茂樹(大妻女子大学教授)

田中直子(大妻女子大学副学長/研究所所長)

モデレーター
(質問セレクト)

下田敦子(人間生活文化研究所准教授)

司会

松村茂樹(大妻女子大学教授)

主催:大妻女子大学人間生活文化研究所

共催:大妻女子大学大学院人間文化研究科

大妻女子大学地域連携推進センター

お問い合わせ

大妻女子大学人間生活文化研究所

TEL: 03-5275-6047

人間生活文化研究所  <https://www.ihcs.otsuma.ac.jp/>

前田建設
MAEDA

子どもたちに贈れるしごとを。
しみず construction
清水建設

ダイダン

SMBC 三井住友銀行

Make Next.
九電工

ヤマザキ

okamura

東京ケーティング株式会社

SMBC日興証券

+EMOTION 心を動かす、未来をつくる。
三菱地所設計

Hewlett Packard
Enterprise

はくばく
The Kokubank Company

Kellogg's

健康にアイデアを
meiji

COCC
Creative Center for Clinical Challenge



【挨拶】

創設記念大会の開催に寄せて

田中 直子

大妻女子大学副学長
人間生活文化研究所所長



挨拶

人間生活文化学会の第1回大会を創設記念大会として開催することができ、心よりうれしく思っております。開催にご尽力くださっている大妻女子大学人間生活文化研究所の下田敦子先生および事務局の方々、また創設記念シンポジウムを企画してくださった本学文学部コミュニケーション文化学科／大学院人間文化研究科言語文化学専攻の松村茂樹先生、そしてシンポジウムでお話しくださるシンポジストの皆様、第1部でお話しくださる大学院生のみなさん、サポートしてくださった賛助会員の企業の方々に、この場をお借りして御礼申し上げます。

大妻女子大学の大学院人間文化研究科は領域横断的に授業や指導を受けられるしくみをもち、社会人にも学びやすい環境を整えてきました。学部卒業後そのまま大学院に入学する学生さんばかりでなく、さまざまなバックグラウンドをもつ方々が年齢・性別を問わず学んでいます。大学院で学ぶ理由や目的はさまざまですが、社会とのつながりを大切にしながら、それぞれの目的や希望にあった授業や指導が受けられるようになっていきます。

第1部では、そんな学生さんたちの大学院進学を選択した経緯や現在の研究内容について、ざっくりばらんに語っていただきます。第2部では、北原秀治氏を始めとするシンポジストの方々に、産業界や公的機関との関係の中での大学院の役割について、さまざまな視点から語っていただきます。第1部、第2部ともパネルディスカッション方式で進行します。ぜひ会場にお越しいただき質問やご意見等ざっくりばらんにいただければと思います。

また、本学大学院の学生は、多くの企業様にご寄付（大妻女子大学人間生活文化研究所の賛助会員費）を通して、その学びを支えていただいております。第3部では、懇親を兼ねた意見交換会を予定しております。支えていただいている企業様、シンポジストの方々、大学院生、大学院に興味を持っている学生さん、高校生、地域の方々のささやかな懇親の場となりますことを祈念しております。

田中 直子（たなか なおこ）

プロフィール：

お茶の水女子大学理学研究科化学専攻修了（理学博士）。帝京大学医学部生化学講座助手を経て、大妻女子大学家政学部食物学科へ。2009年4月より教授。2012年4月より1年間はUniversity College Londonで客員研究員。医学部時代は腎尿細管上皮細胞膜表面の複合糖質の構造と機能について、本学では、メタボリックシンドロームに関わる細胞（脂肪細胞、骨格筋細胞、膵臓β細胞、小腸上皮細胞など）に食品成分が与える影響について、細胞生化学的およびバイオイメーキング的手法を用いて研究を行っている。

最近の論文：

Mariko Suzuki, Kaoruko Endo, Riko Nagata and Naoko Iida-Tanaka, Oleic Acid Activates Mitochondrial Energy Metabolism and Reduces Oxidative Stress Resistance in the Pancreatic β-Cell Line INS-1, *Biol. Pharm. Bull.* **47**, 145–153 (2024)



第1部 大学院生発表

『大学院で学ぼう!～私たちの選択～』

山下 真菜

大妻女子大学人間文化研究科
人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修
修士課程1年

自己紹介

私の研究は、幼稚園の「お昼ごはん」のあり方についてです。昔は家からのお弁当が中心でしたが、今では給食や業者のお弁当など園によって形がさまざまです。この変化がどう起き、どんな意味を持つのかを調べています。まずは文献調査として、幼稚園教育要領や制度の記録、さらに雑誌やレシピ本の記事を読み解き、栄養学的な視点からの検討も踏まえつつ、お弁当がどのように教育や家庭生活の一部として位置づけられてきたかを整理します。そのうえで、実際の幼稚園でアンケートを行い、現在の昼食形態や過去の変化についてデータを集めます。さらに園長先生や先生方にインタビューを行い、「なぜお弁当から給食に変えたのか」「保護者や先生の思いはどうだったのか」といった具体的な背景を掘り下げます。こうした調査から昼食の形を通して、親子のつながりや家庭教育、社会の変化がどのように映し出されるのかを考えていきたいと思っています。

高校生・大学生へのメッセージ

大学では管理栄養士をめざす仲間と切磋琢磨し、濃い4年間を過ごしました。社会人になり、追いかけていた勉強から離れると、不思議なもので学びを追いかけてくなり大学院へ進学しました。ここでは年齢や職業、興味も異なる学生と共に学び、多彩な先生方の授業を通じて新しい知識や考え方を得ています。授業で出会う仲間と励まし合い、支え合いながら、多様な視点に触れられる毎日はとても充実していて楽しいです。

大久保 遥峰

大妻女子大学人間文化研究科
人間生活科学専攻 保育教育学専修
修士課程2年

自己紹介

「理科の授業が連続的な学習になるために—反証場面における仮説の根拠に着目して—」という研究主題で研究を行っています。本研究は、理科の学習が連続的な学習活動に至るための方法の一つとして、仮説の反証場面をつくり、子どもたちが仮説の根拠に立ち返ることが必要であることを明らかにすることが本研究の目的としています。従来の研究では「問い」の設定に焦点が当てられてきていますが、次の問題がどのように生み出されるのかという連続性に関する研究は十分ではありません。本研究では、小学校6年生を対象に「水溶液の性質」「植物のつくりと養分」の単元を取り上げ、仮説が反証された場面で児童が根拠を振り返る場面の設定を行いました。その結果、児童は、仮説の根拠の見直しを通して新たな問題や仮説を生み、学習活動が連続的に展開することが確認されています。反証場面において根拠を振り返らせる教師の働きかけが、連続的な学習活動へつながる方法の一つであることが示唆されています。

高校生・大学生へのメッセージ

私の研究では、子どもたちが自分の考えを試し、時に反証されながら新しい問いを生み出し、連続的に学びを深めていく姿を追っています。大学院での学びも同じで、答えを一度得たら終わりではなく、そこから次の問いが始まるのではないかと感じています。失敗や予想外の結果こそ、学びを豊かにするきっかけです。皆さんも自分の興味や疑問を大切に、問いを重ねる連続的な学びを楽しんでください。



第1部 大学院生発表

『大学院で学ぼう！～私たちの選択～』

柏木 真緒

大妻女子大学人間文化研究科
言語文化学専攻 英語文学・英語教育専修
修士課程2年

渡辺 美波

大妻女子大学人間文化研究科
言語文化学専攻 国際文化専修
修士課程2年

自己紹介

私はハイコンテキスト・コミュニケーションについて研究しています。これは「一を聞いて十を知る」ようなコミュニケーションのことです。ハイコンテキストというのは文脈(コンテキスト)に対する依存度が高いことを意味しています。例えば、お互いのことを分かり合っていたり、共通の背景を持っていたりすると、簡単なやり取りだけでもコミュニケーションを成立させることができます。

これまで日本語話者はハイコンテキスト文化、英語話者はローコンテキスト文化と言われてきましたが、実証的な研究は十分に行われてきませんでした。私はローコンテキスト文化と言われてきた英語話者による、ハイコンテキスト表現に関心があります。また、文化というマクロの視点ではなく、個人のコミュニケーションというミクロの視点を提示することで、これまでの二極化した見方に反論することを現在の目標としています。

高校生・大学生へのメッセージ

大学院の授業は少人数制のため自分の意見を述べる機会も多いです。そのため学部的时候以上に、考える力が身に付いたと実感しています。また、講義とは異なり自分の興味関心のあることについて授業内でも先生方のご意見を伺うことが出来ます。

大学院の進学を視野に入れている方は様々なご不安もお持ちだと思います。今日は是非、会場にいる私たち学生に直接ご質問ください。些細なことでも大丈夫です。解決の一助になれば幸いです。

自己紹介

大学では比較文化学や映画学を中心に学び、現在はフィリピン映画におけるLGBTQ+の表象について研究しています。近年、フィリピン映画はカンヌ国際映画祭やベルリン国際映画祭で数々の賞を受賞し、世界的に注目を集めてきました。私の考えでは、フィリピン映画の特徴は「性の多様性の表現」にあると感じています。フィリピンのテレビや映画には、ゲイやトランスジェンダーの人々が自然に登場しますが、彼らの描かれ方はしばしば歪んだイメージを与えることもあり、これはLGBTQ+当事者の抱える問題の一つとなっています。

私の研究では、「バクラ (Bakla)」と呼ばれる人々に焦点を当てています。バクラは、フィリピンにおいて女性的な男性、異性装、同性愛者を指すジェンダー・カテゴリーの一つです。映画の中での彼・彼女らの表象方法が、フィリピンの政治や社会、そして大衆文化にどのように影響し合っているのかを探究しています。

高校生・大学生へのメッセージ

大学は、自分の興味のあることを自由に学べる場所です。そして、多くの出会いが待っている場所でもあります。高校や学部の頃は、興味のあることにはどんどん挑戦して、たくさん遊び、たくさん勉強してほしいです。大学院には、さらに深い学びと新しい世界が待っています。将来どんな道を選んでも、自分の決断はきっと大丈夫です。まずは、大学での生活を悔いのないように過ごしてほしいと願っています。



第1部 大学院生発表

『大学院で学ぼう！～私たちの選択～』

新明 綾乃

大妻女子大学人間文化研究科
現代社会専攻 臨床社会学専修
修士課程2年

岸 苑実

大妻女子大学人間文化研究科
臨床心理学専攻
修士課程2年

自己紹介

大学卒業後に医療機関でソーシャルワーカーとして約14年勤務し、患者・家族の相談支援業務を行ってきました。現場時代、がんに罹患した患者さんから「仕事を辞めたら生活に張り合いがなくなった」と語りを聞いたことが私の大学院進学の原因です。実践で得た経験知を研究の観点からクリアにしたいと考え、大学院へ進学をしました。大学院の研究テーマは、がん患者の就労支援におけるソーシャルワーカーの役割とその効果を、事業場と医療機関の社会連携の視点から考察することです。がん罹患した従業員をもつ事業場へのアンケートやインタビュー調査から、がんサバイバーの社会復帰に寄与できるよう、日々研究を重ねています。また、多様な調査手法を用いた調査企画能力、実際の調査を運営管理する能力、高度な分析手法による報告書執筆などの実践能力を養うために、専門社会調査士の取得を目指しながら日々学んでいます。

高校生・大学生へのメッセージ

「研究」というと、とても難しそうで、敷居が高いイメージがありますが、多様化する社会で日々疑問に感じることはないでしょうか。私は、その疑問こそが研究の原点だと感じています。人々の生活や暮らし、価値観は日々変化・変容しており、社会で起きていることを明らかにすることが求められています。また、学びに年齢制限はありません。是非、ご自身の突き詰めたテーマを大学院での学びに繋げてほしいと思います。

自己紹介

私は修士論文で「心理面接におけるクライエントの不満の表明」について研究しています。心理療法やカウンセリングの場では、クライエントがセラピストに対して不満を抱くことは珍しくありません。しかし多くの場合、その不満はセラピストに伝えられない傾向があります。一方で、不満が率直に伝えられ、それをセラピストが受け止めて対話が深まると、クライエントにとって対人関係に関する重要な学びになったり、両者の信頼関係が深まり面接が進展したりすることもわかっています。そこで、クライエントがどのように不満を表すのか、またその過程でセラピストのどのような関わりが重要となるのかを明らかにしたいと考えました。研究では、複数のセラピストと面接経験を持つ9名にインタビューを行い、不満を伝えた体験と伝えなかった体験について語っていただき、その内容を質的に分析しました。

高校生・大学生へのメッセージ

私は臨床心理士・公認心理師の資格取得を目指して大学院に進学し、修士論文に取り組んでいます。研究では、クライエントの方々にインタビューを行い、様々な学びや発見がありました。また、クライエントの方々の率直な声を現場にフィードバックし、支援をより良くしていくために、研究はとても重要で大きなやりがいがあると実感しています。学びに没頭できる大学院生活はかけがえのない経験だと思いますので、臨床心理学に関心のある方は、ぜひ挑戦してみてください。



第2部 シンポジウム【基調講演】

産官学で創る大学院教育—高度専門職業人への道

北原 秀治

東京女子医科大学先端生命医科学研究所
特任准教授（先端工学外科学）



抄録

現代社会が直面する課題は、少子高齢化や地域格差、ケアと働き方の再編、急速なデジタル化などが重なり合う複雑系となっており、学術と実務を往還する新しい大学院像が求められています。いま必要なのは、研究成果を社会へ橋渡ししつつ、人々の暮らし・文化・福祉・教育に根ざした問題解決を担う「高度専門職業人」を体系的に育成することです。本講演では、産業界・行政・大学が対等に連携し、実課題を教材化して学びと実装を同時に進める共創型大学院のあり方を、海外の先進事例を通じて描きます。とりわけ米国ハーバード大学ケネディスクールでは、公共政策大学院の教育実践に加えて、Social Innovation + Change Initiative (SICI) というプログラムが展開され、起業家や政策担当者、学生が一体となって社会課題の解決に取り組んでいます。ここでは、学生は実務家とチームを組み、現場の課題解決を目的とした戦略設計やプロトタイプを提示し、実装までを意識した学びを積み重ねています。これにより大学院が「知の探究」にとどまらず、「社会に実装される知の創造」の場へと拡張していることが示されています。こうした事例に共通する鍵は、①社会課題を学びの中心に据えること、②分野・組織・世代を越境すること、③成果の可視化と継続的な評価で学修と社会的インパクトを両立させることです。大妻女子大学が有する「人間生活文化」の知を土台に、たとえば福祉・教育・ジェンダー・地域共生といった領域で産官学の協働をデザインすれば、多様な学習者のリカレントを含む実装志向の大学院モデルを構築できます。

本講演では、大学と社会が協働しながら学びを再構築する未来像を共有します。

北原 秀治（きたはら しゅうじ）

プロフィール：

日本歯科大学卒業，東京女子医科大学大学院医学研究科修了，早稲田大学大学院経済学研究科中途退学。東京女子医科大学解剖学・発生生物学講座，ハーバード大学・マサチューセッツ総合病院放射線腫瘍科を経て現職。博士（医学）。専門は，基礎医学（解剖学，腫瘍病理学，公衆衛生学）に加え，医療経済学および医療・介護分野のデジタル化。現在，日本科学振興協会（JAAS）代表理事，海外日本人研究者ネットワーク（UJA）理事を務めるとともに，行政機関や企業などのアドバイザーも多数務めている。



第2部 シンポジウム【パネルディスカッション】

高度専門職業人として活躍するための力とは

荒川 敦史

国立研究開発法人 科学技術振興機構 (JST)

抄録

私は科学技術の推進やイノベーションの創出をミッションとする公的機関に勤務しています。

科学技術の進歩は、様々な形で人類に便益や影響をもたらし、また社会のあり方を大きく変革してきました。インターネットやスマートフォンなどはわかりやすい例でしょう。でも、ある科学者や専門家が優れた研究をして新たな発見をしても、すぐに社会に実装され、目の前にある課題を解決したり、私たちの生活を便利にすることはなかなかありません。その発見を、製品やサービスとして具現化し、新たな価値をもたらすまでには、様々なプロフェッショナル（このシンポジウムにあわせて「高度専門職業人」と言います）の知恵と力、そして対話と協働（共創）が必要です。

例えば、科学技術で新たな種を生み出す人。その種を社会課題やニーズと結びつけ、プロジェクトとして具体化する人。資金や設備などリソースを確保する人。プロジェクトの進捗をマネジメントする人。創造されたソリューションや製品を社会に出す人。それに伴い必要な法律やルールを整備する人。

様々な専門性を持つ高度専門職業人が対話・協働して、はじめて物事が前に進んでいきます。国の科学技術に関する基本計画においても、近年、「共創」の重要性は謳われてきました。

高度専門職業人には様々な役割があり、求められる専門性も多種多様ですが、私は、共通して大切なことは「課題の本質をとらえ、解くべき問いを立てる力」「境界を越えて、多様な人と共創を進める力」ではないかと考えます。もちろん、個々人が高い専門性を持ち、時代に対応して常にアップデートしていくことはその前提です。

大学院は「専門性」「広い視座」「課題発見・設定力」「越境力」「コミュニケーション力」を涵養できる場／時間であってほしいと期待しています。この観点から、大学院の役割について、セッションにおいて議論を深めることを楽しみにしています。

荒川 敦史（あらかわ あつし）

プロフィール：

早稲田大学政治経済学部政治学科卒業。13年の企業勤務を経て2003年に科学技術振興機構（JST）に入構。JSTでは国際協力、社会連携・コミュニケーション、経営企画等の業務に従事。海外駐在（JSTパリ事務所長）や人事交流として他機関勤務（文部科学省、新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO））も経験。現在、JST国際部先端国際共同研究推進室長として、科学技術先進国やASEAN諸国との連携強化に向けた共同研究事業を推進。



第2部 シンポジウム【パネルディスカッション】

（仮）AI時代のキャリアに必要な真の「ガクチカ」とは

鈴木 竜太郎

日本ヒューレット・パッカート合同会社 人事統括本部

抄録

日本の新卒採用市場は、少子化とマクロ経済の好調を背景とした「超売り手市場」が続いています。多くの企業は、特定の専門知識よりも学生の潜在能力を重視する傾向にあり、この「ポテンシャル採用」が日本の特異な雇用環境を作り出してきました。その結果、学生は「就活で評価されること」を逆算し、学業よりもアルバイトやサークル活動といった「ガクチカ（学生時代に力を入れたこと）」に時間を割く傾向が強まっています。

しかし、AIが普及し、不確実性が高まる現代社会では、こうした従来の採用・教育モデルは通用しなくなりつつあります。単純な知識や定型業務はAIが代替するため、これからの時代に求められるのは「答えのない問い」に挑む力です。企業が本当に求めているのは、まさにこの能力を養うことのできる「調査能力」「論理的思考力」「探究力」です。

これらの力は、大学での学究的な探究を通じてこそ、最も効果的に磨かれます。先達が残した研究や文献を読み解き、仮説を立て、それを検証するプロセスは、ビジネスにおける課題解決の思考プロセスそのものです。また、学問を通じて養われる「本質を見抜く力」や「多様な視点を持つ力」、そして「論理的に伝える力」は、AIには代替できない、人間ならではの強みとなり、キャリア構築において不可欠なスキルです。

AIは人間の仕事を奪うのではなく、より創造的で高次元な仕事に集中するためのツールです。AIを使いこなすには、何を問うべきかを考える力、すなわち「根源的な問いを立てる力」が重要になります。多くの大学生にとって、この力を養う最も有効な手段は、大学での学問に真剣に向き合うことだと考えます。今後の社会で活躍するためには、「タイパ（タイムパフォーマンス）」に囚われず、学問的な探究にじっくりと時間をかけること、すなわち「学究的な閑暇」を持つことが、これまで以上に重要になっていくことでしょう。

鈴木 竜太郎（すずき りゅうたろう）

プロフィール：

慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程修了。新卒で日本ヒューレット・パッカート(HPE)に入社し、以来一貫して人事としてのキャリアを積む。米系IT企業への転籍、大手自動車メーカーを経て2020年にHPEへ再入社。現職では営業部門のHRビジネスパートナー兼、新卒採用・採用ブランディング・タレントマネジメント領域の担当マネージャーとして勤務。



第2部 シンポジウム【パネルディスカッション】

意思決定のコンパス - 大学院で身につけたSEリーダーの決断力

吉越 里桜

SCSK株式会社 ITインフラソリューション事業部

抄録

技術の進化が加速する現代において、SEリーダーに求められるのは、勘や経験だけでない確固たる決断力です。

本講演では、私が大学院での研究活動を通じて鍛えられた、物事の本質を見抜く力についてお話しします。そして、その力がリーダーとして、日々葛藤しながらも複雑な課題から核心を捉え解き明かし、チームを最適な道へ導く『意思決定のコンパス』として機能している事例をご紹介します。

これから専門性を高めたいと考えている方々へ、大学院での学びがキャリアにどのような価値をもたらすのか、そのヒントをお届けします。

吉越 里桜（よしこし りお）

プロフィール：

大妻女子大学を卒業後、同大学院（言語文化学専攻修士課程）に入学しました。

大学院では「中国のスマートシティ化」について学び、中国上海で留学を経験しました。

現在、SCSK 株式会社（IT インフラソリューション事業部）で金融業界のお客様向けにクラウドを活用した共通基盤運用に携わっています。



第2部 シンポジウム【パネルディスカッション】

女子大学大学院の可能性

松村 茂樹

大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科教授

抄録

2017年5月30日に全面施行された改正個人情報保護法は、個人の尊厳と情報の自律的な管理を社会全体に問い直す契機となりました。このような「転換期」において、女子大学大学院には、知の継承にとどまらず、新たな社会構造の創出に向けた知的実践の場としての可能性が広がっています。

従来の日本社会は、「タテ社会」と言われる上下関係を重視する構造の中で動いてきました。しかし今、そこに風穴を開けるのが、女性が本来的に持つ「ヨコにつながる力」、すなわち共感や傾聴、協働を基盤とするコミュニケーション能力です。これは単なる人間関係の潤滑剤ではなく、組織や社会を柔軟かつ持続可能なものへと変えていく鍵であり、まさに「サーバントリーダーシップ」の実践と重なります。

女子大学大学院は、この力を体系的に育成・展開できる数少ない教育機関です。学生たちは、従来の「やらされる仕事」から脱却し、自ら課題を見出し、仲間とチームを組んで新規事業や社会的プロジェクトを立ち上げていく主体的な働き方へとシフトしていくことが求められています。そのために不可欠なのが「提案型能力」や「創造型能力」です。

これらの能力は、単なるスキルではなく、大学院でおこなわれる「興味—疑問—仮説—論証」という学問の本質のプロセスを通じてこそ養われるものです。すなわち、自らの関心から出発し、現象に対する問いを立て、仮説を構築し、それを多角的に検証するという知的営みのなかで、課題を深く理解し、他者と共有可能な形で解決策を提示できる力が育まれていくのです。これはまさに、自律的に思考し、協働しながら新しい価値を社会に提案する力の土台であり、現代社会が必要とする専門性と創造性の融合といえます。

もはや女子大学大学院は、「女性のための教育機関」という枠を超えつつあります。ここは、共感力や協働性、しなやかなリーダーシップといった、これまで女性に備わっているとされてきた資質を、性別にかかわらず探求し、学び合いながら社会に発信していける知的・実践的な拠点となりつつあります。ヒエラルキー型社会に替わる、共創型・支援型の新しい社会モデルを構築するうえで、その果たす役割は今後ますます重要になるでしょう。

松村 茂樹（まつむら しげき）

プロフィール：

筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科中退 博士（文学、筑波大学）。ボストン大学客員研究員、東京大学非常勤講師などを歴任。専門はアジア太平洋国際交流論、サーバントリーダーシップ論。最近の著書に『長尾雨山研究』（研文出版）などが、最近の論文に「「サーバントリーダーシップ」の本質」（『人間生活文化研究』No.33）「ディズニー映画に見る女性表象（1）—『白雪姫』から『シンデレラ』へ」（『コミュニケーション文化論集』23号）などがある。